

令和3年度 沼津市・富士市連携 埋蔵文化財活用 特別展示・講演会

# 愛鷹山に眠る**開拓者**たち

東海最大級の古墳群と地域の再生



講演会資料集



令和4年3月

沼津市教育委員会・富士市



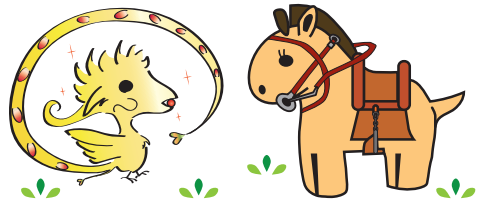


【表紙写真】

- |      |           |         |             |
|------|-----------|---------|-------------|
| [中央] | 南から愛鷹山を望む | / 沼津市   | (沼津市教育委員会蔵) |
| [左下] | 単鳳環頭大刀柄頭  | / 芝荒2号墳 | (沼津市教育委員会蔵) |
| [右下] | 単鳳環頭大刀柄頭  | / 二ツ塚古墳 | (沼津市教育委員会蔵) |

【裏表紙写真】

- |      |        |             |             |
|------|--------|-------------|-------------|
| [中央] | 船津古墳群  | / 富士市       | (富士市蔵)      |
| [右上] | 馬具(杏葉) | / 荒久城山古墳    | (沼津市教育委員会蔵) |
| [左下] | 玉類     | / 船津L-207号墳 | (富士市蔵)      |



# 愛鷹山麓の古墳群と馬具



## 〔富士市〕須津古墳群出土の馬具

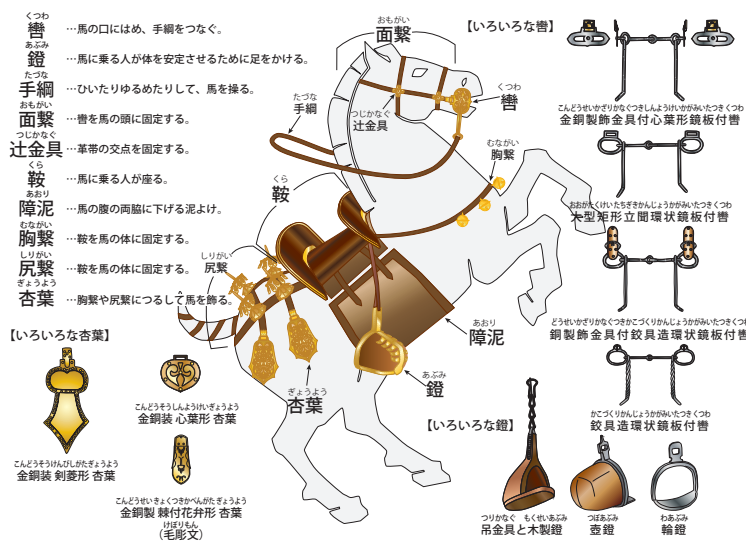
千人塚古墳、中里大久保古墳(K-95号墳)、K-98号墳、K-99号墳からの出土品。須津古墳群は、愛鷹山麓周辺における馬の生産や飼育、馬を使った交通網の管理などを行った集団の墓域とみられる。(富士市蔵)



## 〔沼津市〕

### 荒久城山古墳出土の馬具（杏葉）

船津古墳群の南東に位置する古墳から出土した。この古墳の主は、駿河東部地域ではいち早く金銅装馬具セットを入手した有力者とみられる。(沼津市教育委員会蔵)



## 馬具の名称と役割

## 〔富士市〕船津 L-62 号墳出土の馬具

(富士市蔵)

# 海辺の集落と手工業生産



〔沼津市〕中原遺跡から浮島沼と愛鷹山麓の古墳群を望む



〔沼津市〕中原遺跡の調査状況



〔沼津市〕中原遺跡出土のガラス小玉鑄型  
(沼津市教育委員会蔵)

## 田子の浦砂丘上の拠点集落

沼津市原に所在する中原遺跡は、石川古墳群と浮島沼を挟んだ田子の浦砂丘上に拓かれた大規模集落である。愛鷹山麓の古墳群と同様、7世紀が集落の最盛期であり、遺跡からは手工業関連製品として砥石や紡錘車、鉄鉗などの鍛冶具のほか、古墳にも納められたであろう大量の鉄製品、そして全国的にも極めて珍しいガラス小玉を作るための鑄型が出土した。また釣針や土錘などの漁具や海産物の加工用の埴もあり、複合的な手工業生産・水産加工の拠点集落と考えられる。



## 〔富士市〕 中原4号墳の横穴式石室と 出土農工具

中原4号墳は富士山南麓に築かれた径11mの円墳。農工具や鍛冶具、生産用具が多数副葬された状況から、この古墳の主は、土木開発や農業・林業、布・皮生産、鉄器生産に携わる渡来人を含む技術者集団を多数率いた「富士山麓の開発王」と評価されている。このような指導者が、愛鷹山の古墳群の集団と共同でプロジェクトを実施していた可能性も十分に考えられる。

(富士市蔵)

# 例 言

- 1 本書は、令和3年度 沼津市・富士市連携 埋蔵文化財活用 特別展示・講演会『愛鷹山に眠る開拓者たち 東海最大級の古墳群と地域の再生』の開催にあわせて動画公開した講演会に係わる資料集である。
- 2 特別展示・講演会は、沼津市教育委員会と富士市の共催により実施した。事業費は『地域の特色ある埋蔵文化財活用事業』の補助を得て実施した。
- 3 本書の編集は、富士市文化振興課が行った。
- 4 特別展示・講演会は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、当初の開催方法・日程を大きく変更して実施した。以下に関連する資料や動画などを提示する。

富士山かぐや姫ミュージアム秋のテーマ展 令和3年度 沼津市・富士市連携 埋蔵文化財活用 特別展示  
『愛鷹山と生きるー原始・古代の生存戦略』

2021（令和3）年9月13日（土）から同年11月28日（日） 会場 富士山かぐや姫ミュージアム



令和3年度 沼津市・富士市連携 埋蔵文化財活用 特別展示

『愛鷹山に眠る開拓者たち ～東海最大級の古墳群と地域の再生』

2022（令和4）年3月10日（木）から同年3月24日（木） 会場 沼津市立図書館4階展示ホール



# 愛鷹山に眠る**開拓者**たち

東海最大級の古墳群と地域の再生



講演会資料集



## 目 次



### 巻頭図版

愛鷹山麓の古墳群と馬具

海辺の集落と手工業生産

### 例 言

### 目 次

愛鷹山に眠る開拓者たちとは ～本企画の開催趣旨にかえて～ (木村 聡) …… 1

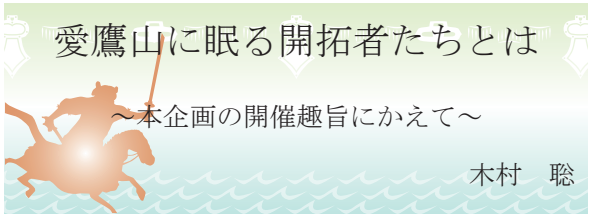
愛鷹山麓の後期古墳を考える (滝沢 誠) …………… 3

愛鷹山南麓の古墳群と浮島ラグーンの開発 (藤村 翔) …………… 9

古墳を地域で活かす (菊池 吉修) …………… 13

愛鷹山周辺遺跡分布図





## 1 はじめに

「沼津が「お町（都市）」として発展し始めたのはいつごろですか？」学芸員として地域の方々に沼津の歴史を紹介しているところからこうした質問を受けることがある。これは立場によってさまざまな回答があるだろうが、例えば江戸時代の沼津城を中心とした町割りから現在の町割りへ大きく変化させた大正時代は、回答の一つの候補だろう。令和5年度に市制100周年を迎えるということから、行政的には沼津「市」としての歴史はこの時から始まるといえる。

しかし日ごろから古来の豊かな歴史文化に触れている考古学の専門職員としては、別の回答を提示してみたい。歴史を紐解いてみると、沼津市域には37,000年前ごろから始まる旧石器時代から人々が暮らし始めているが、古い遺跡は愛鷹山の山中で見つかるケースがほとんどで、現在の沼津駅周辺、いわゆる市中心域の開発はまだ始まっていない。3世紀

中葉という年代の前方後方墳である高尾山古墳の築造は、様々な地域と交流を持ちつつ、地域を広く治める「王」の登場ともいえる画期であるので、候補としてもよいが、やはりこの段階でも集落は増加しているものの都市的な要素はまだ見ることはできない。さらに古墳時代中期（5世紀）ごろには富士山の噴火によって、富士や沼津にはほとんど人が暮らさなくなる時期があることも、現代の街の発展と隔たりのあるといえるだろう。

では、筆者が考える「お町」の開始時期はいつか。それは8世紀の「奈良時代」と提示としておきたい。首都が奈良に置かれ、畿内から現在の富士・沼津には東海道が整備された時代である。この時代は交通の要衝が中央政権と深い関係を持つことが多く、富士は富士郡として、沼津は駿河郡として、東海道沿いには官衙（古代の役所）、規模の大きな集落、仏教寺院も造られるようになった。道、役所、大規模集落、宗教施設など、まさに現代につながる都市的な要素の登場時期といえ、富士市域では「東平遺跡」（富士市伝法）、沼津市域では「上の段遺跡」（大手町）「日吉廃寺跡」（大岡）などがこうした要素を持った遺跡である（図1）。



図1 奈良時代の官衙関連遺跡と前時代の古墳密集地帯



## 2 古墳時代後期は「お町」誕生の助走期間

しかし、富士・沼津が奈良時代に突如発展したかといえば、必ずしもそうではない。古墳時代後期から飛鳥時代（6世紀後半から7世紀）には、荒廃した富士・沼津において、これまでよりも規模の大きな集落が古代東海道沿いに登場し始め、さらには愛鷹山南麓にはこれら集落の有力者が葬られたと考えられる古墳が約1,000基以上も築かれていることが、近年の集落の調査や古墳の再整理で明らかになってきた。特に1,000基以上という数は東海地方でも最大級となる。

これらの遺跡の出土品をみると、集落では鉄製品やガラス玉を製作していたことを示す手工業製品（写真1）や水産加工具と考えられるナベなどがあり、また古墳の副葬品には刀や鉄鎌（やじり）などの武具の他に、物資運搬においても重要な役割を果たしていた馬の存在を示す馬具、製糸や織物のための紡錘車や針、加工具である刀子、山河の開発を行うのに使用したであろう斧や鎌などがある。これらの遺物には渡来系技術者との関連を示すものもあることから、愛鷹山に葬られた人々は馬や当時最先端の道具等を用いながら地域を治めていた人物であると推定される。つまり、愛鷹山に眠る古墳の被葬者たちこそが5世紀に荒廃した地域を整え、その後の社会の礎を築いた「開拓者」といえるのではないか、いわば奈良時代における富士・沼津の発展は、古墳時代後期に行われた開発が下地になっているのではないか、そのように最新の研究成果から考えられるようになってきているのである。



写真1 鍛冶道具

## 3 富士市・沼津市の共同開催の意味

以上のような背景を見出すことができる古墳時代後期の古墳群であるが、その分布の中心は沼津市西部の石川以西、富士市東部の須津や船津以東にあることがこれまでの調査で明らかになっている。また大規模な集落も沼津市西部の一本松や桃里に展開した。このことを鑑みるに、両市の発展の礎の中心は現在の市境付近にあったといえよう。

前節でみた古墳被葬者の評価は、富士市は富士市、沼津市は沼津市、それぞれに研究が進められていたものであるが、行政区分を取り払って両市の学芸員が「愛鷹山南麓の古墳群および集落」という同一の視点で遺跡を見ることで、よりその性格が鮮明になってきた。これは連携事業の大きな成果である。

こうした両市の発展において大きな意味を持つ古墳群の保存活用に対し、今後も連携を図っていくことをも目的に、今回の講演会と特別展示は企画されている。講演会では、沼津市では文化財保護審議会委員、富士市では富士市文化財保存活用地域計画策定協議会委員を務められている滝沢誠氏に愛鷹山南麓の古墳群について最新の研究成果に基づいて全体的な評価をしていただくよう依頼した。さらに富士市からは事例紹介とともに沼津市に先行して実施されている最新の研究成果を、そして静岡県文化財課には近年の文化財活用の現状と課題の紹介と古墳の保存活用をテーマにそれぞれ報告いただく。

特別展示では、富士・沼津両市から出土した初公開のものを含む豊富な出土品を展示し、開拓者たちの素顔に迫っている。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、講演会は無観客となるなど、本企画に参加・見学される方々にはご迷惑をおかけした。ただ、新たな試みとして講演会はYouTube配信となっているため、現地に来られない方もぜひ動画を見て愛鷹山の古墳文化に触れてもらいたい。

（沼津市教育委員会文化振興課）





## 1 愛鷹山麓の古墳

富士山の南側に位置する愛鷹山の南麓には、中小の河川によって開析された深い谷とそれらによって隔てられた尾根が樹枝状に発達している。その眼下に広がる駿河湾の沿岸には、富士川や狩野川の砂礫を供給源として形成された田子の浦砂丘が東西約22kmにわたって弧を描くように延びている。この愛鷹山麓と田子の浦砂丘に挟まれた東西約15kmの浮島ヶ原低地は、昭和の干拓事業によって完全に陸化するまで、現在の田子の浦港付近で駿河湾と接続する内水面（＝浮島沼）を形成していた。

こうした地形的環境にある愛鷹山麓には、6世紀の終わりから7世紀にかけて数多くの古墳が営まれ、その数は1,000基を超えるとみられている。なかでも、富士市須津古墳群、同船津古墳群、沼津市石川古墳群はそれぞれ200基前後の古墳からなり、この一帯を代表する古墳群となっている。これまでの発掘調査によれば、それらを構成する古墳のほとんどは直径10m前後の小規模な円墳で、横穴式石室を埋葬施設としている。まさに、古墳時代後期に特徴的な群集墳の姿そのものと言えよう。

じつは、これほど多くの古墳が密集している場所は、静岡県内はもちろんのこと、東日本全体を見渡してみても数少ない。ここでは、そうした古墳密集地帯が成立した背景を探る手がかりとして、①集落と古墳群の関係、②馬具副葬古墳の分布、③特徴的な籠手の副葬に着目し、愛鷹山麓における後期古墳の特質に迫ってみたい。

## 2 山麓の古墳と海辺の集落

愛鷹山麓は、標高100～200m付近を中心に後期旧石器時代の遺跡が数多く分布することでもよく知られている。つづく縄文時代にも同様の立地をとる遺跡が点在し、湖沼に面した南向きの緩斜面が狩猟や採集、漁撈を生業とした人々にとって好都合な場所であったことがうかがえる。

この一帯における水田稲作は弥生時代中期中葉に始まるが、集落の数が増加するのは弥生時代後期からである。尾根の先端に立地する沼津市目黒身遺跡や低地内の微高地に立地する同雌鹿塚遺跡は後期前半を代表する集落で、生産基盤となる低地に隣接し、雌鹿塚遺跡では多数の木製農具が出土している。

つづく弥生時代後期後半になると様相は一変し、集落は愛鷹山麓東部の標高100～150m付近に集中的に営まれるようになる。植出遺跡や八兵衛洞遺跡を含む足高尾上遺跡群がそれで、遺跡群の北側には尾根や谷を東西に貫いて掘られた1km以上に及ぶ溝の存在が確認されている。このような高地に密集度の高い大規模な集落が成立する要因については様々な見方があるが、比較的短期間にそれが認められる点からすれば、何らかの社会的インパクトによるものとみるのが妥当であろう。

古墳時代前期になると、集落は再び尾根の先端部や低地部に営まれるようになる。なかでも、富士市祢宜ノ前遺跡や同宮添遺跡のように浮島ヶ原低地の周囲に立地する集落がみられるようになる点は、富士市沖田遺跡で発見された準構造船の存在ともあわせて、浮島沼の内水面を利用した水上交通の発達をうかがわせるものである。ところが、それらの集落の多くは中期になると忽然と姿を消してしまう。その要因としては、河川の氾濫や大規模地震による地盤の変化、富士山の噴火に伴う降灰といった自然災害の影響が指摘されている（藤村2017）。

古墳時代後期の集落は、再び浮島ヶ原低地の周囲に営まれるようになる。とくに、愛鷹山麓に多数の古墳が築かれる後期後半以降の集落は、田子の浦砂丘上に列状に分布している点に大きな特徴がある。富士市三新田遺跡、沼津市中原遺跡、同東畑毛遺跡などが代表例であり、古墳造営の最盛期と重なるように、それらの多くは7世紀前半に集落形成を開始している（木村2016）。これらの事実をふまえるならば、愛鷹山麓に多数の古墳を営んだ集団の主な居住域は、浮島沼を挟んで対岸に位置する田子の浦砂丘上に求めるのが妥当であろう。集落と古墳群の具体的な対応関係については個別に検討が必要であるが、例えば、大規模古墳群の一つである石川古墳群を造営した集団は、その対岸に位置する中原遺跡に



集落を形成していた可能性が考えられる。

以上のように、古墳時代後期になって砂丘上に居住域を定めたいいくつかの集団は、北側に広がる生産域（浮島沼と周囲の低地部）とさらにその北側につづく墓域（愛鷹山麓）という南北方向の細長い範囲を個々のテリトリーとしていたことが想定される。愛鷹山麓の後期古墳を理解するにあたっては、こうした景観的特徴をまずは把握しておく必要がある。

### 3 馬具副葬古墳と陸上交通

愛鷹山麓における群集墳の特徴として、鉄製馬具を副葬した古墳の多さを指摘することができる。もちろん古墳数自体が多いため、絶対数のみで単純な評価はできないが、一定数の古墳が確認されている伊豆半島海岸部に馬具の副葬がほとんどみられない点からすれば、愛鷹山麓に群集墳を営んだ集団と馬との深いかかわりは認めてよいだろう。

馬具副葬古墳は、6世紀に入ると各地で増加していくが、日本列島全体でみると、いくつかの集中域が認められる。西日本では福岡県域に数多くの分布がみられ、東日本では群馬県域を最多として、長野県域や静岡県域にも多数の分布が認められる。そして、それらの馬具副葬古墳は常に一定の分布状態を示しているわけではなく、年代の推移とともに分布状態に変化が生じることが知られている。

図1・2は、東海・中部地方から関東地方にかけての馬具副葬古墳（5世紀後半～7世紀）の分布を年代別に示したものである。あくまでも現状の調査データにもとづく分布図であるが、先述の伊豆半島と同様に、現在の霞ヶ浦よりもはるかに広大な水域が広がっていた茨城県南部における馬具副葬古墳の少なさが目に付く。同地域における古墳調査例は決して少なくないことから、こうした事実は、副葬品として馬具の選択に現実世界での馬利用の多寡が関係していたことを示唆している。つまり、水上交通とのかかわりが深い伊豆半島や茨城県南部などでは馬の利用が低調であったと想定される一方で、馬具副葬古墳が集中する地域では陸上交通と馬とのかかわりが検討の視野に入ってくるのである。

そこで、愛鷹山麓を含む静岡県東部に目を向けてみると、5世紀後半（須恵器編年 TK208～TK47式期）

～6世紀前半（MT15～TK10式期）の馬具副葬古墳はきわめて乏しく、わずかな事例が北伊豆に知られているのみである。ところが6世紀後半（TK43～TK209式期）～7世紀（TK217～TK48式期）になると、一気にその数は増加に転じる。愛鷹山麓における群集墳の盛行と軌を一にする現象と言えるが、じつは県域全体でみると、5世紀後半～6世紀前半の馬具副葬古墳は西部（遠江）に数多く分布し、6世紀後半～7世紀になると、愛鷹山麓を含む東駿河や北伊豆での事例が増加するという顕著な変化が認められる。

そうした分布の変化は、静岡県域以外でも確認することができる。よく知られているように、長野県域では、5世紀後半から6世紀前半にかけての馬具副葬古墳が南信（伊那谷）に集中するのに対し、6世紀後半を経て7世紀に入ると、東信（佐久平）に分布の中心が移動する。群馬県域では、6世紀後半～7世紀に西毛で馬具副葬古墳が増加し、7世紀には北部の山間部に馬具副葬古墳の分布が拡大する。同様の動きは神奈川県域でも認められ、そこでは6世紀前半までの散在的なあり方から転じ、6世紀後半～7世紀の馬具副葬古墳は西相模に遍在するようになる（東北・関東前方後円墳研究会編 2017）。

こうした変化の背景をめぐっては、房総半島の馬具副葬古墳が古代の東海道ルート（東京湾東岸～印旛沼東岸）に沿うかたちで線状に分布している点などに着目し、古墳時代後期には馬を利用した交通路の整備が進んだとする見解が示されている（松尾 2002）。そうした視点に立つと、ほぼ軌を一にして東駿河・北伊豆と西相模に馬具副葬古墳が増加する現象の背景としては、峠越えの陸上交通路とのかかわりを検討する余地があると思われる。また、同様の視点から、東信と西毛における馬具副葬古墳のあり方や、群馬県北部の山間部に馬具副葬古墳が増加する現象も理解できるかもしれない。さらに、その点で言えば、7世紀に入って北伊豆で馬具副葬古墳（横穴墓）が急増する現象も大いに注目しておく必要がある。

以上のように、愛鷹山麓に馬具副葬古墳が多くみられる現象については、馬を利用した陸上交通の発達という側面から理解することが可能と思われる。

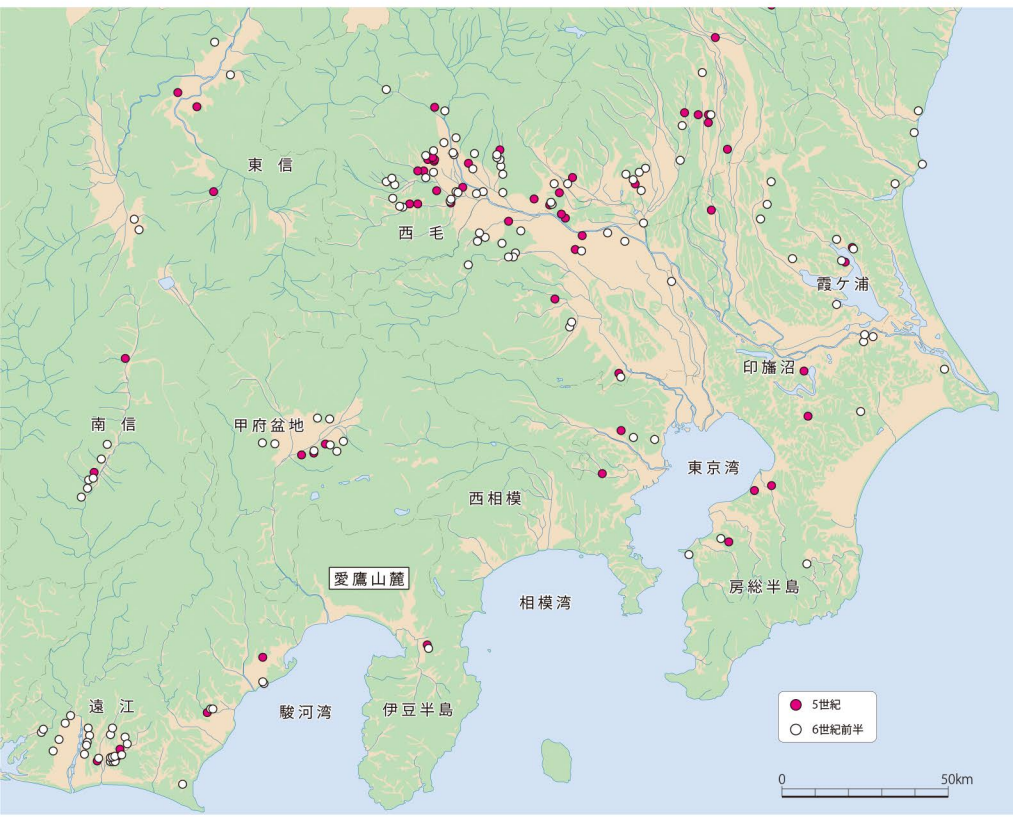


図1 馬具副葬古墳の分布：5世紀～6世紀前半

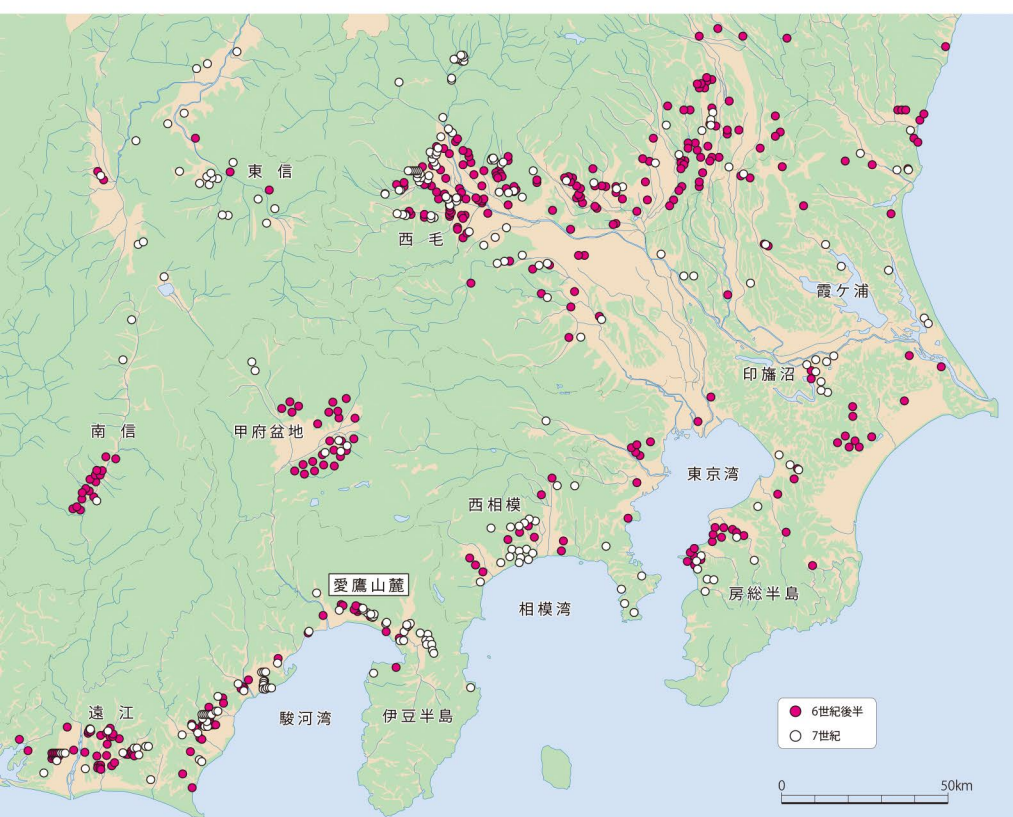


図2 馬具副葬古墳の分布：6世紀後半～7世紀

それが、人や情報の移動、物資の運搬のみならず、軍事にも資するものであったことは想像に難くない。

加えて、愛鷹山麓一帯では、複数組の馬具を副葬した古墳が存在することから、馬匹生産がおこなわれていた可能性が指摘されている（大谷 2016）。その一角には平安時代に岡野牧が設置されており、伊那谷と同様に深い谷によって隔てられた緩斜面が馬の生産と管理に好都合であったことは確かであろう。

東駿河から北伊豆にかけての地域は、関東平野への入り口となる水陸交通の要衝であるが、愛鷹山麓に多くの古墳が営まれた6世紀末から7世紀にかけては、陸上交通の発達に一層の進展があったとみられる。その具体的なルートは、当該期の集落が列状に分布する田子の浦砂丘上に求められ、それが古代東海道の原型になったと考えられる。愛鷹山麓における群集墳の展開は、馬の生産に適した地形的環境と東西を結ぶ陸上交通の要衝という地理的環境を抜きにして語ることはできない。

#### 4 特徴的な籠手の副葬

馬具副葬古墳のあり方からうかがえる東西方向の結びつきとは別に、愛鷹山麓の後期古墳を考える際に見逃せないのは、南北方向の結びつきである。

愛鷹山麓とその西側にあたる富士山麓の地域は、富士川ルートを介して歴史的に甲府盆地との結びつきが強い。群集墳が盛行する古墳時代後期においても、東駿河で主流となる特徴的な無袖の横穴式石室が甲府盆地にも分布しているという事実がある。そうした関係を補強する材料として、ここでは特徴的な鉄製籠手の副葬について取り上げてみたい。

言うまでもなく鉄製籠手は下腕部を保護する甲冑の付属具であり、甲冑本体と時を同じくして古墳時代前期から古墳への副葬が認められる。ただし、全国で900箇所程度を数える甲冑副葬古墳の総数に比べてその数は少なく、これまでの確認例は、可能性のあるものを含めても40例程度にとどまっている。それらは形態的特徴によって、篠籠手、筒籠手、板籠手に大別されるが、ほとんどの事例は、細長い篠状の小札を横方向に綴じ付けて下腕部を一周させるかたちの篠籠手である。

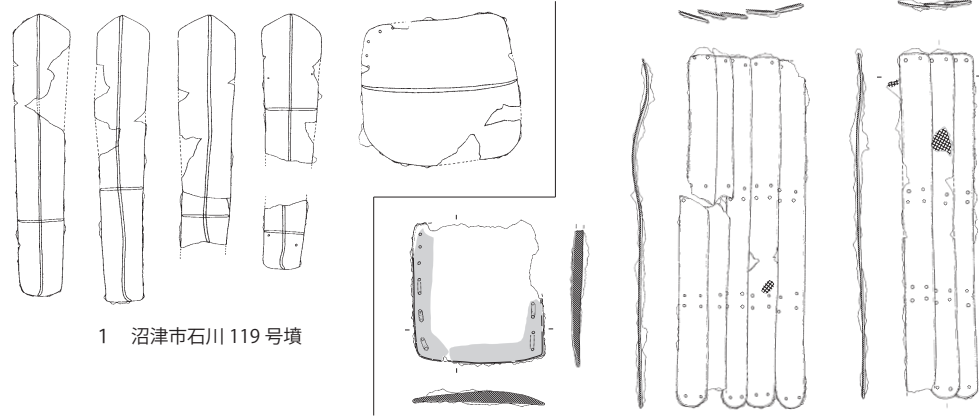
愛鷹山麓では、古墳時代をつうじても数少ない鉄製籠手が、沼津市石川119号墳と富士市船津L-212号墳から出土している（図3-1・2）。いずれも6世紀末～7世紀前半の篠籠手で、手の甲を覆う部分（手甲）と本体を構成する長さ20～23cmほどの篠札が出土している。本来両腕で一双をなす籠手の片方が副葬されていた可能性があり、小札甲の破片が一切出土していないことも注目される。

じつは、愛鷹山麓の事例とほぼ同時期に副葬されたとみられる鉄製篠籠手の類例が甲府盆地内に3例知られている。甲府市考古博物館構内古墳、同稲荷塚古墳、笛吹市平林2号墳からそれぞれ出土したもので、前二者では複数の存在が確認できる（図3-3～5）。また、いずれの古墳でも小札甲の存在を示す明確な破片は出土していない。

愛鷹山麓と甲府盆地の籠手副葬古墳には、両腕副葬と片腕副葬の二者があるとみられ、篠札の頭部形状による構造上の差異も指摘できるが、5例とも小札甲の副葬を認めることができず、籠手のみを副葬した事例である可能性が高い。籠手のみを副葬した事例は、鉄製甲冑が出現して間もない古墳時代前期にもわずかに認められるが、前期には冑のみ、あるいは甲のみを副葬した事例がほとんどで、鉄製甲冑そのものの流通量が限られる中で象徴的な部分副葬がおこなわれた可能性が考えられる。一方、小札甲が数多く生産され、一定の流通量が確保されている中での籠手の副葬は、そこに何らかの特殊事情が介在していたことを疑わざるを得ない。管見による限り、7世紀代の籠手副葬古墳が上記5例のみであることも、その特異性を際立たせている。

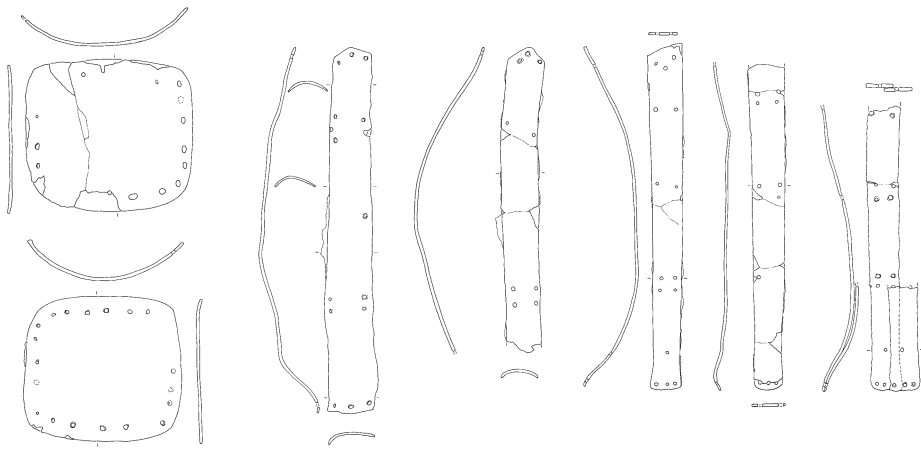
6世紀から7世紀にかけての鉄製甲冑は、前方後円墳などの有力者クラスの古墳や、群集墳の中でも中核となる古墳から出土することが多い。上記5例の中には、金銅装馬具（考古博物館構内、稲荷塚、平林2号）や金銅装大刀（石川119号）を出土した事例が認められることから、後者に列せられる可能性があるものの、いずれも墳丘規模は10～15m程度とけっして大きくはない。

これらの古墳は、無袖の横穴式石室を埋葬施設とする点でも共通しており、籠手のみを副葬するというきわめて特殊な埋葬行為の背後には、共通の活動

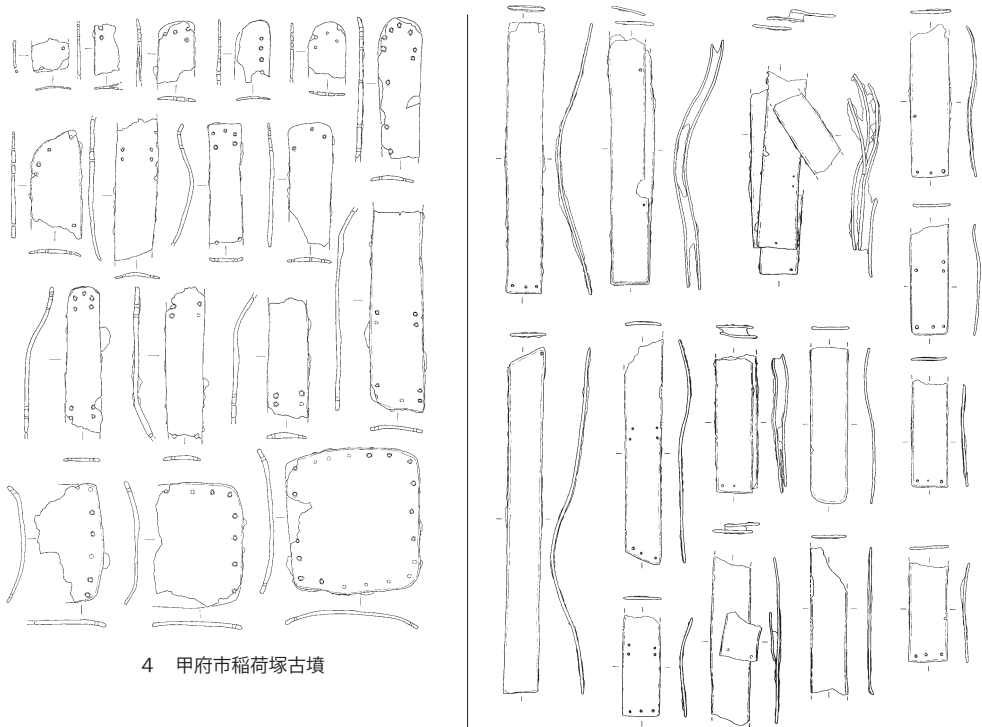


1 沼津市石川 119号墳

2 富士市船津 L-212号墳



3 甲府市考古博物館構内古墳



4 甲府市稲荷塚古墳

5 笛吹市平林 2号墳

0 1:5 10cm

図3 副葬された鉄製籠手 (1/5)



基盤が存在していた可能性が高い。想像を逞しくするならば、甲冑の一部（籠手）を死後に象徴的に副葬するという埋葬規範を、何らかの活動をともにする中で共有するに至ったケースが考えられよう。

これまで十分に検討されてこなかった特徴的な籠手の副葬は、無袖の横穴式石室などとともに、愛鷹山麓と甲府盆地の強い結びつきを示すものである。そこには、南北交流にも軸足を置いた愛鷹山麓における後期古墳造営集団の特質を垣間見ることができ

## 5 結節点としての愛鷹山麓

同時期に営まれた集落のあり方から、愛鷹山麓に多数の古墳を築いた集団の居住域は田子の浦砂丘上に求められ、それらの集団は浮島沼を間に挟んで砂丘から山麓に及ぶ活動領域をもっていたと想定される。また、6世紀後半～7世紀における馬具副葬古墳のあり方は、馬を利用した陸上交通の発達と愛鷹山麓の地形的環境を生かした馬匹生産地としての性格をうかがわせる。加えて、特徴的な籠手の副葬からは、横穴式石室の共通性によって指摘されてきた愛鷹山麓と甲府盆地の強い結びつきをより個別的なレベルで確認することができる。

以上の検討結果をつうじて浮かび上がるのは、東西交通及び南北交通の結節点（ハブ）としての愛鷹山麓の姿である。とりわけ数多くの古墳が営まれた6世紀末～7世紀の動きに焦点を当てるならば、そこには馬を利用した陸上交通の発達という広域に及ぶムーブメントがあり、馬匹生産にも適したこの地域の重要性をいっそう高めたものと推測される。

ただし、忘れてならないのは、愛鷹山麓の眼下に広がる駿河湾の存在であり、依然としてこの地域では海上交通も重要な役割を果たしていたとみられる点である。奈良時代以降の遺跡のあり方から、富士川を越えてしばらく山麓側を東進する古代東海道は、浮島沼の西側で進路を南に向け、その後は田子の浦砂丘上を東進するルートが想定されている。それは、現在の田子の浦港付近に想定される「ミナト」を經由していくルートとみられ、古墳時代後期後半の主な集落が山麓沿い（後の根方街道沿い）ではなく、田子の浦砂丘上に並ぶ現象は、その原型が少なくと

も古墳時代後期後半に遡ることを示している。

こうした見方をふまえるならば、愛鷹山麓に数多くの古墳を営んだ集団は、陸上交通の発達に寄与するだけでなく、海上交通との接続にも関与した集団であったと考えられる。富士市中原4号墳の副葬品が示すような先進的な手工業生産の展開も、そうした交通条件に支えられたものなのであろう。

ここでは、三つの視点から愛鷹山麓に多数の後期古墳が営まれた背景を探ってみた。もとより全体像を把握するには不十分であり、今後さらに多角的かつ詳細な検討をつうじて、愛鷹山麓における後期古墳の特質が総合的に解明されることを期待したい。

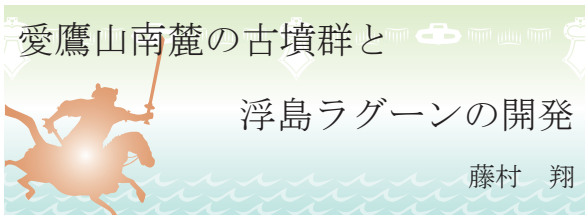
## 参考文献

- 大谷 宏治 2016「中原4号墳出土刀剣類・馬具の特徴と埋葬者の性格」『伝法中原古墳群』富士市教育委員会  
加藤学園考古学研究所 1976『駿河石川古墳群第三次発掘調査報告書』  
木村 聡 2016「調査の成果」『中原遺跡発掘調査報告書第3分冊』沼津市教育委員会  
塩入 秀敏 1993「長野県の馬具副葬古墳について一科野古代馬匹文化研究のための一作業一」『上田女子短期大学紀要』16  
末木 健 2005「甲斐の馬と馬飼」『牧と考古学—馬をめぐる諸問題—』山梨県考古学協会  
東海古墳文化研究会編 2006『東海の馬具と飾大刀』  
東北・関東前方後円墳研究会編 2017『馬具副葬古墳の諸問題』第22回東北・関東前方後円墳研究会大会  
富士市教育委員会 1999『船津古墳群』  
富士市教育委員会 2013『船津古墳群Ⅱ』  
藤村 翔 2017「浮島沼西岸・沖田遺跡の調査からみた湖沼利用の推移」『富士山かぐや姫ミュージアム館報』第32号  
松尾 昌彦 2002『古墳時代東国政治史論』雄山閣  
山梨県教育委員会 1987『岩清水遺跡・考古博物館構内古墳』  
山梨県教育委員会 1988『稲荷塚古墳』  
山梨県教育委員会 2000『平林2号墳』

## 挿図出典

図1・2：塩入1993、末木2005、東海古墳文化研究会編2006、東北・関東前方後円墳研究会編2017のデータをもとに作成。

図3：加藤学園考古学研究所1976、富士市教育委員会2013、山梨県教育委員会1987・1988・2000の各掲載図を一部改変して作成。



## 1 はじめに

愛鷹山の山体には、およそ10万年前の火山活動の停止以後、浸食により深い谷がいくつも刻まれ、その南方に広がっていた浮島沼（潟湖、ラグーン）に向かって張り出すように丘陵や河岸段丘が発達する。南麓の谷部や丘陵上には、主として6世紀末から7世紀にかけて、総数1,000基以上を数える多数の古墳群が並立して展開した。ここでは愛鷹山南麓の古墳群を、浮島沼ラグーンを生産基盤とした集団の奥津城として捉え直すことで、地域社会の変遷と大型群集墳の発生要因を検討したい。

## 2 須津古墳群の概要

**須津古墳群とは** 須津古墳群は、愛鷹山南西麓を流れる須津川の周囲に広がる209基の古墳から構成される。4世紀に浅間古墳（前方後方・91m）、5世紀末～6世紀前半に天神塚古墳（前方後円？・51m）、寺屋敷古墳（不明）、琴平古墳（円・30m）が築かれた後、6世紀末頃から中里K支群において横穴式石室を主体部とする群集墳の形成が始まる。

**千人塚古墳の登場** 須津古墳群のなかでは新興の墓域である神谷（須津）支群に7世紀中頃に築かれた千人塚古墳は、駿河東部地域では最大級となる全長11.4m以上の大型横穴式石室を有する。金銅装毛彫馬具のセットを保有する千人塚古墳の主たる被葬者は、飛鳥時代の駿河東部地域を代表する首長の一人であったことは疑いない。とりわけ、愛鷹山南麓を墓域とした集団のなかでは傑出した指導者であったとみられ、東海・関東の境界に設置された後述する王領の現地経営や水陸交通の管理、軍備を担った地域首長として評価できる。

## 3 愛鷹山南麓古墳群の被葬者集団

**横穴式石室からみた集団像** 横穴式石室規模による階層構造からは、各共同体構成員の集団は、中型上位～大型石室の指導者層を上位とするタテの構造

で統率されたことが明らかである。ただし、集団同士は没交渉的なものではなく、石室平面企画の共有状況からは、墓域の異なる集団でも、古墳構築の際にはヨコ同士の活発な繋がりがあったことが推定された。このことは、集落などの生活域において、墓域の異なる集団同士が雑多に居住していた可能性も想起させる。

**装飾付大刀からみた集団像** 大刀形式によって表象される役割については、袋頭大刀を軍事活動、環頭大刀を外政・技術を掌握する職掌とみる見解が参考となるが、東海・関東諸地域の有力層においてはまず軍事が第一に重視されるという（内山2019）。

各古墳群単位でも各種の大刀形式がみられる点を重視すれば、一つの集団内に性格や職掌が異なる人格がモザイク状に参画していた状況を推察できるが、そのなかでもまず軍事的な役割が当古墳群の指導者層に期待されていたことが窺える。

**農工・生産関連具からみた集団像** 愛鷹山南麓古墳群には、土木具（鎌）、木工具（鉋、錐状鉄製品）、や紡織（紡錘車）、布・皮革生産関連（針）やその関連遺物が副葬されるものがある。また鉄器生産や加工に関連する工具（提碓）や関連祭祀具（鉄鐸）も出土する。こうした農工・生産関連具の特徴は、富士山南麓において土木開発や手工業生産を主導した伝法古墳群でみられた遺物構成ともよく共通し、愛鷹山麓周辺の集団内にも、同種の技術者や彼らを束ねる指導者が存在したとみられる。また先述した鉄鐸のほか、金銅製鈴や銅釧、装飾付ガラス玉などの渡来系装身具類の副葬状況も顕著であり、集団内部に渡来系技術者が存在した可能性がある。

## 4 浮島ラグーンの開発と倭王権

**田子の浦砂丘上の集落群と中原遺跡** 中原遺跡は駿河湾沿岸部の田子の浦砂丘上、浮島沼に面して立地する集落跡であり、これまでに250棟以上の堅穴建物調査されており、7世紀代における駿河東部地域を代表する集落の一つといえる。7世紀代には豊富な手工業関連遺物（砥石、紡錘車、ガラス小玉鑄型）や、各種鉄製品（鉄鎌、刀装具、馬具）、玉類などが出土するほか、8世紀代に鍛冶具（鉄鉗）や鉄滓といった手工業関連遺物、銅製鉸具、分銅が



愛鷹山に眠る開拓者たち  
東海最大級の古墳群と地域の再生

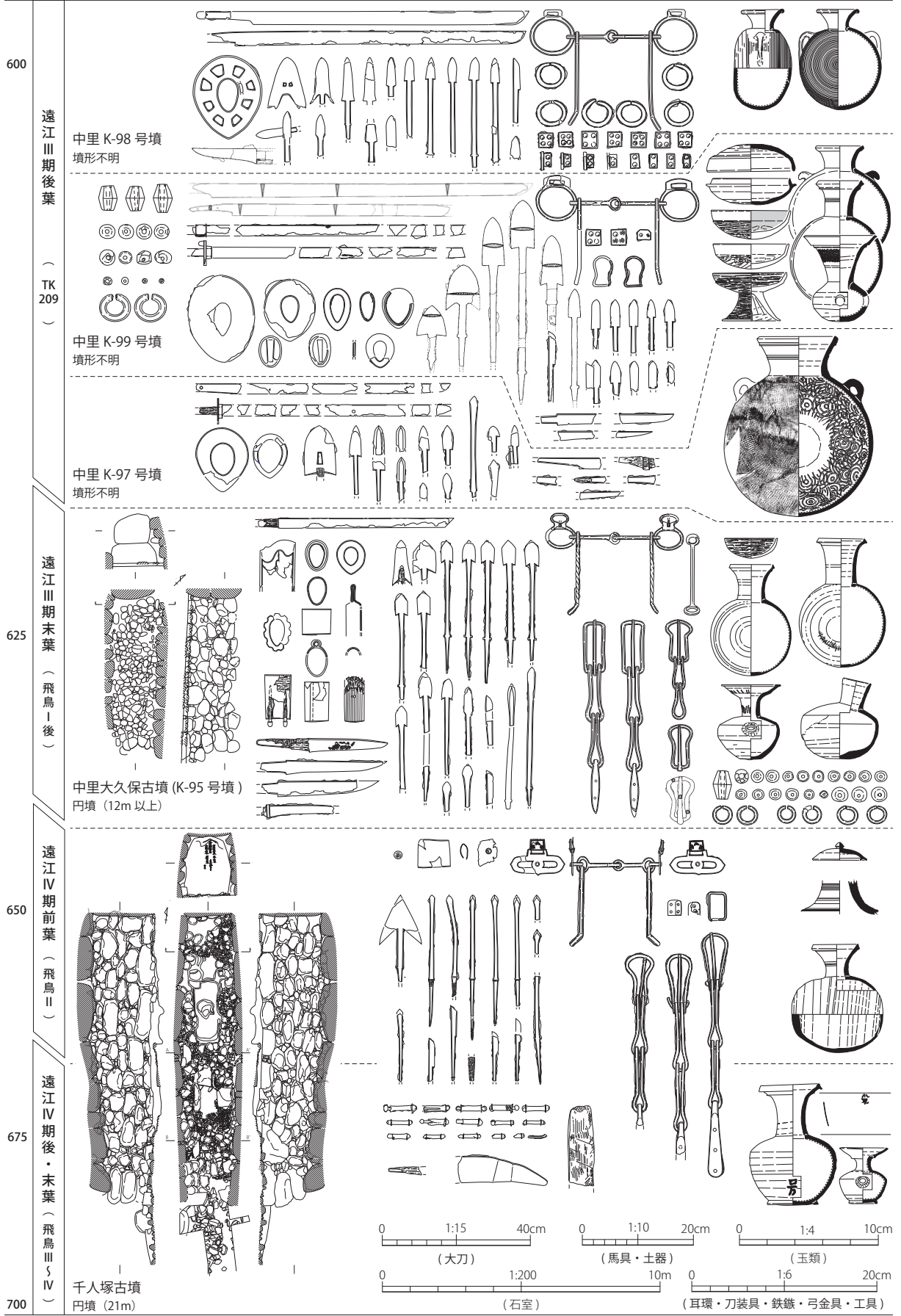


図1 須津古墳群の横穴式石室と主要遺物



出土する。さらに、7世紀代より鉄製釣針や大型土錘などの漁具のほか、回遊性魚類の煮炊き用とされる土師器の大鍋がまとまって出土した点も特筆される。中原遺跡の性格としては、全国的に極めて珍しいガラス小玉生産を筆頭に、鍛冶や製糸・布生産なども担う、複合的な手工業生産・水産加工拠点集落として評価できる。

**稚贄屯倉と砂丘上の集落群** 中原遺跡のような田子の浦砂丘上の集落を評価する上で見過ごすことのできないのが、稚贄屯倉の問題である。『日本書紀』に登場する稚贄屯倉は、現在の田子の浦港から沼川周辺に7世紀前半頃に設置された、上宮王家（聖徳太子の一族）への堅魚製品の貢納拠点とみる説が有力であり、漁具や水産加工工具が集中する中原遺跡の特徴とよく合致する。仁藤敦史氏は早くに、稚贄屯倉を「大王への大贄と対応し、有力な皇子（稚・ワカ）へ貢納物（贄・ニエ）を献上するために設定された屯倉」とし、「原初的なミツキ・ニエとして堅

魚製品が（上宮王家へと）貢納された段階」に機能したことを推定する（仁藤 1996）。

## 5 おわりに

**王領の設置と大型群集墳** 中原遺跡の高度な複合的生産集落が、浮島沼ラグーン沿岸の「王領」化の産物の一つであったとすれば、同集落から浮島沼を挟んだ対岸に展開する愛鷹山南麓の古墳群の集団は、その王領を現地経営した共同体構成員やその指導者層とみなせる。愛鷹山古墳群と浮島沼ラグーンは、東海における大型群集墳の偏在性と「王領」の観点からも、重要なモデルになり得る地域である。

### 主要参考文献

- 内山敏行 2019「大刀・甲冑・馬具からみた関東と東海東部の首長墓」『賤機山古墳と東国首長』季刊考古学・別冊30、雄山閣
- 仁藤敦史 1996「駿河・伊豆の堅魚貢進」静岡県地域史研究会編『東海道交通史の研究』清文堂出版

（富士市市民部文化振興課）

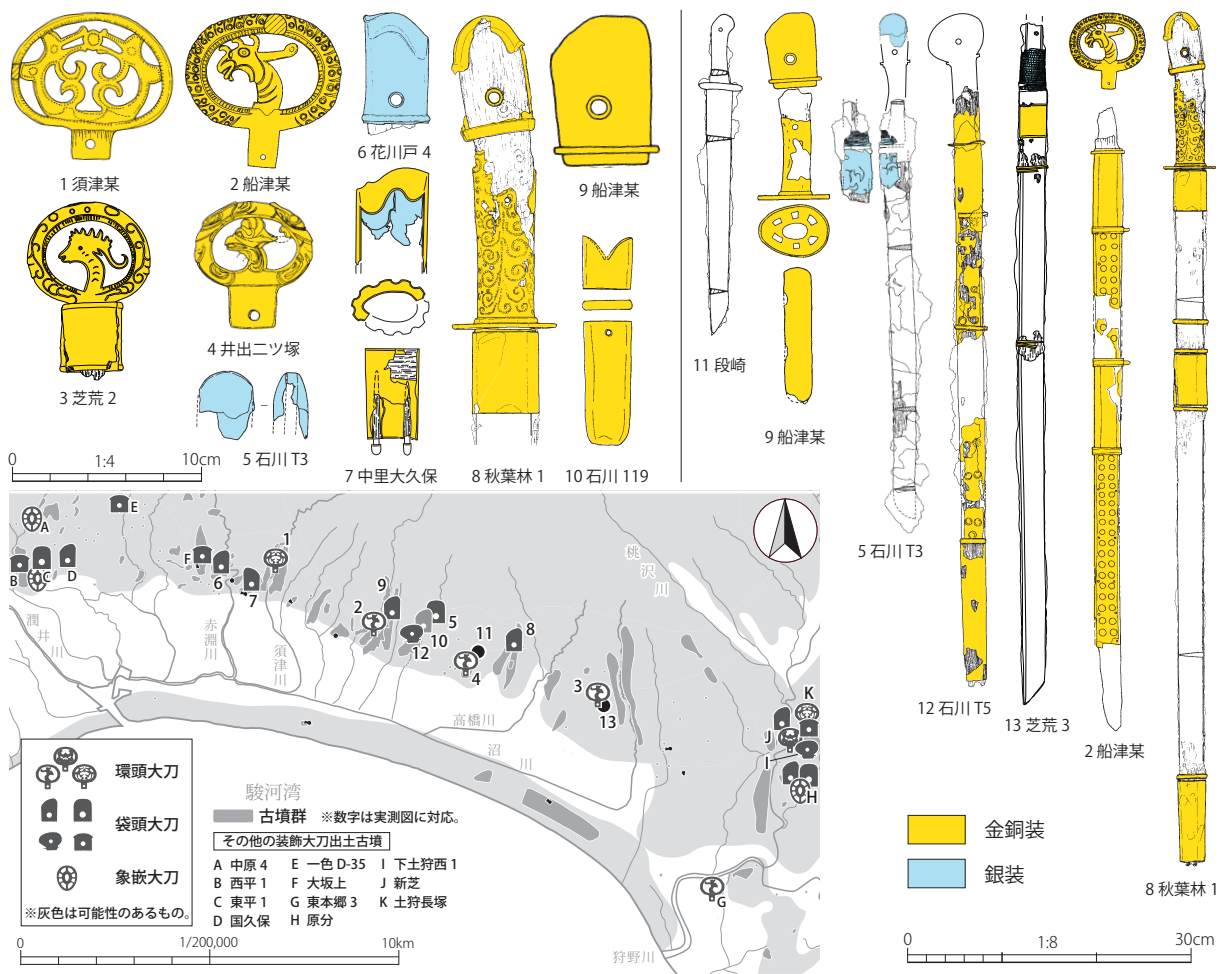


図2 愛鷹山南麓古墳群周辺の装飾付大刀

※ 遺物図は各報告書等より転載

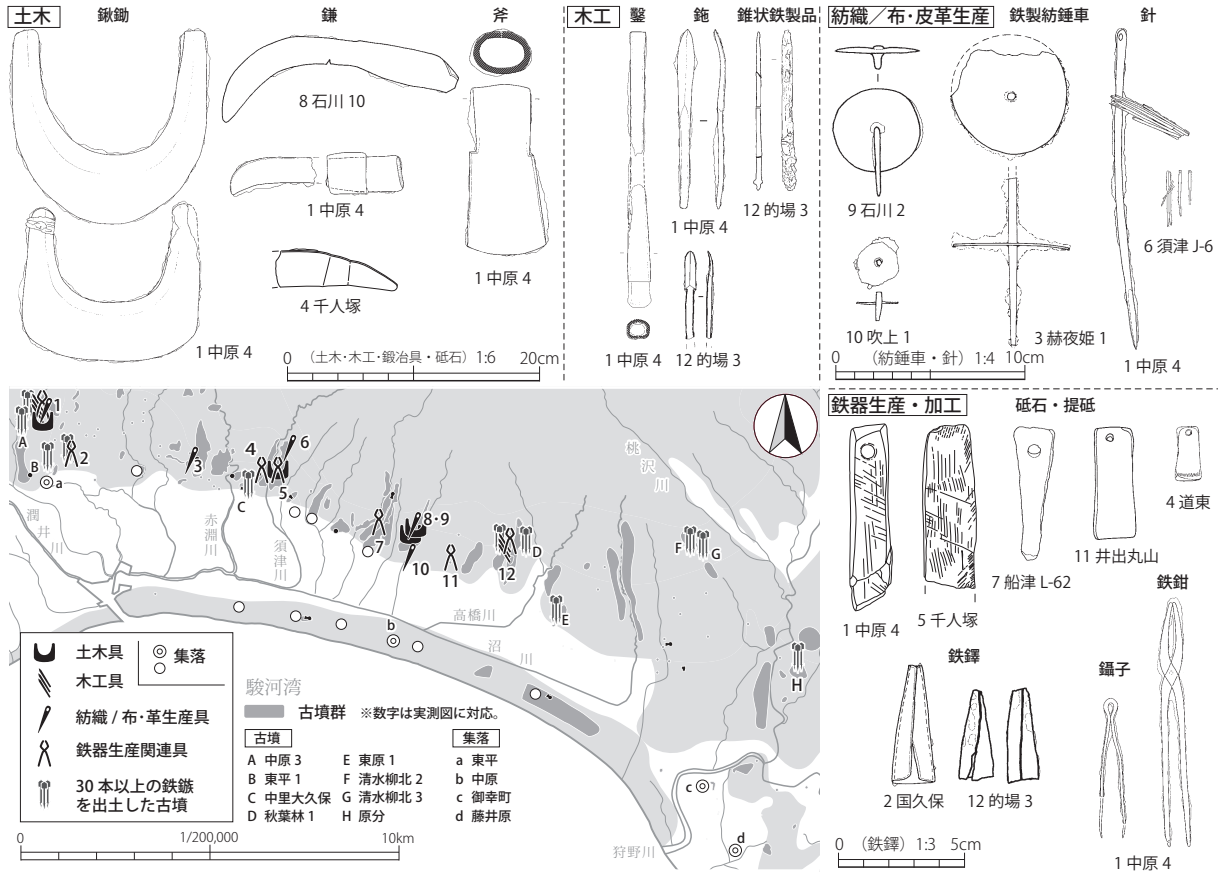


図3 愛鷹山南麓古墳群周辺の農工・生産関連具

※ 遺物図は各報告書等より転載

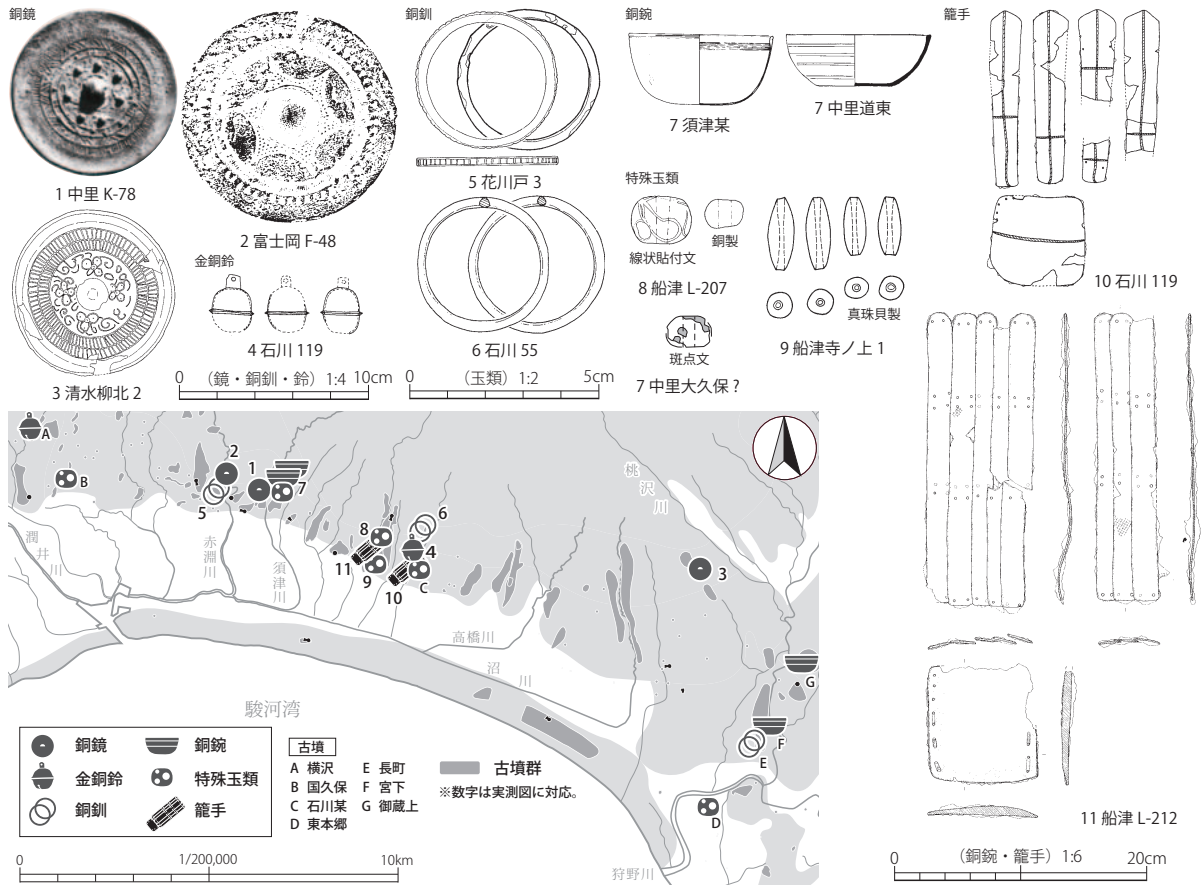


図4 愛鷹山南麓古墳群周辺の特殊な装身具・銅製品

※ 遺物図は各報告書等より転載



## 1 はじめに

我が国の長い歴史のなかで生まれ、育まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民の財産である文化財。古墳や古墳群も、文化財保護法（以下、保護法）に基づき保護が図られる文化財の一つである。

保護法では、文化財を「有形文化財」、「無形文化財」、「民俗文化財」、「記念物」、「文化的景観」、「伝統的建造物群」の六類型に区分し、さらに土地に埋蔵されている文化財である「埋蔵文化財」や文化財の保存に必要な技術等も保護の対象としている（図1）。古墳や古墳群は、「記念物」に当たるが、土地に埋もれた状態では埋蔵文化財として扱われる。なお、保護法における「保護」とは、「保存」と「活用」の両者を含んだ意である。本質的価値を守りながら、現代的な使用方法を付加していくことが文化財の保護とも換言できよう。

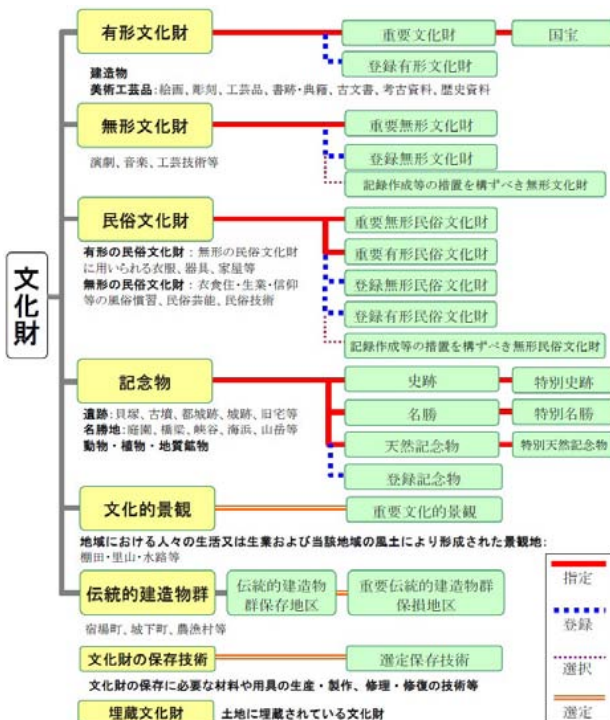


図1 文化財類型と国指定等の体系

文化財の中でも重要なものは、法令に基づき、国や地方自治体により「指定」されることで、重点的に保護が図られる。「記念物」である古墳や古墳群は指定されると「史跡」として扱われる。現在、静岡県内の古墳及び古墳群は、9件が国、18件が県の史跡として指定されている。令和元年に世界文化遺産に登録された”百舌鳥・古市古墳群—古代日本の墳墓群—”は、今、最も注目されている古墳であろう。世界遺産登録には、国内法で保護が図られていることが前提であり、百舌鳥・古市古墳群も史跡に指定されている。

## 2 文化財の総合的な保存と活用

地域で守り伝えられてきた文化財は、現在、過疎化・過疎化の進行に伴う滅失や散逸等の防止が喫緊の課題となっている。その一方で、地域資源として観光やまちづくりに活かす期待も高まっている。このような社会状況を背景に、地域における文化財の総合的かつ計画的な保存・活用の促進と、地方文化財保護行政の推進力の強化を図るために、平成30年6月に文化財保護法が改正された（平成31年4

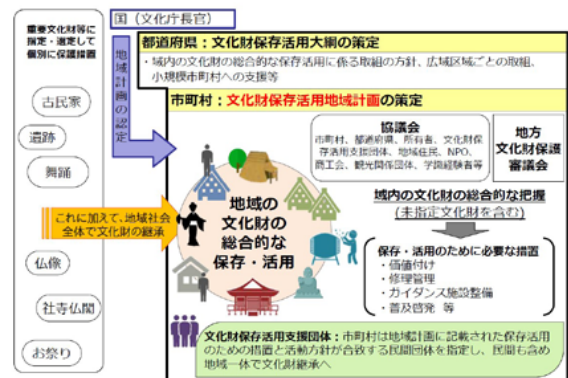
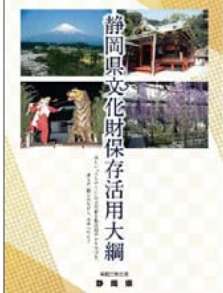


図2 法改正による新たなスキーム



**【基本理念】**  
美しい“ふじのくに”の文化財を県民総がかりで守り、だれもが親しみながら、未来へつなぐ

**基本方針1**  
文化財の確実な保存

**基本方針2**  
文化財を支える多様な人材の育成

**基本方針**  
文化財の効果的な活用

図3 静岡県文化財保存活用大綱



文化を雄弁に物語る歴史資料である。

古墳群の在り方は、全国一様ではなく、他とは異なった特徴を持つ古墳が集中する地域もある。愛鷹山南麓も、その一つである。紙幅の都合上、愛鷹山南麓の後期古墳が持つ特長のうち、ここでは埋葬施設に焦点を当ててみたい。

古墳時代後期、埋葬施設の主流の一つとなるのが、横穴式石室（以下、石室）である。石室は、遺骸や副葬品を納める“玄室”から“羨道”と呼ばれる通路が墳丘外へ続く。埋葬後は、羨道部分に石を積み上げ、封鎖される。石室には、地域の特徴を持つ形態がある。東海地方では、三河に淵源を持つ三河系石室が広く見られ、畿内の王墓等で採用される形態に連なる畿内系石室も有力墳等に採用される。ともに、玄室と羨道の境に“袖”と呼ばれる部位を持つ。しかし、愛鷹山南麓を含む駿河東部では、三河系石室や畿内系石室は見られず、無袖の石室で占められる。さらに、開口部に対し玄室床面が一段下るといふ、三河系や畿内系の石室には無い特徴も併せ持つ。さらに、玄室に注目すると、東駿河のなかでも愛鷹山南麓では組合式箱型石棺を持つものが多々見られる。一方、富士山南麓では石棺は少なく、“死床仕切”と呼ばれる間仕切石を持つものがみられる。

愛鷹山南麓は、全国的にみても、独自性の強い古墳が齊一的に展開する一方で、副葬品は多様性に富む。古墳時代後期、この地では、人々がそれぞれ様々な生業を営むものの、墓制の上では繋がりを持っていたことがうかがえる。愛鷹山南麓に展開した、独自の古墳文化は、住民はもとより、広く知られるべき、地域が誇る歴史資源といえよう。

#### 4 結語

多くの古墳は長い年限を経る中で、埋もれ、生い茂った木々で覆われる等、往時の姿をとどめていない。築造当時の姿への復元整備は、市民や来訪者にも、わかり易い活用の事例である。県内では、浜松市二本ヶ谷積石塚古墳群、藤枝市若王子古墳群、沼津市井田松江古墳群、三島市向山古墳群等で古墳群の特色を生かした整備が行われている。

ただし、復元整備には、調査に基づいた検証が必要であり、安易な復元は、来訪者が間違った歴史像を抱く恐れがある。また、経費的な負担も大きい。近年では、復元整備だけではなく、ARやVR等の先端技術を取り入れた古墳の活用も各地で見られる。

一方で、浅間古墳のように、神社があることで、現在まで伝えられてきたことも、この地域の歴史文化の一側面である。茶畑と同居する古墳の姿も、この地域ならではの姿として守り、活かされるべき、歴史資源といえる。古墳をキーワードとしたストーリー展開により、他の文化財あるいは他の地域と結びつけることは、地域の歴史文化の理解を促進するとともに、古墳の他面的な保存・活用につなげることができよう。

#### 出典

- 図2 文化庁 HP 掲載「文化財保護法改正の概要について」より抜粋
- 図3～5 静岡県文化財保存活用大綱
- 図6 鈴木一有 2017「東海地方における横穴系埋葬施設の多様性」『日本考古学協会 2017 宮崎大会資料集』

(静岡県スポーツ・文化観光部文化局文化財課)

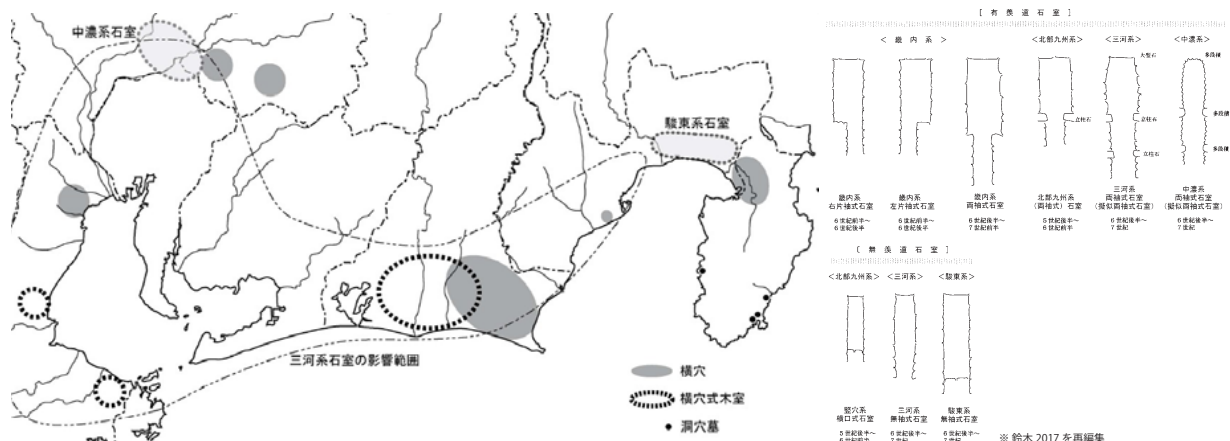
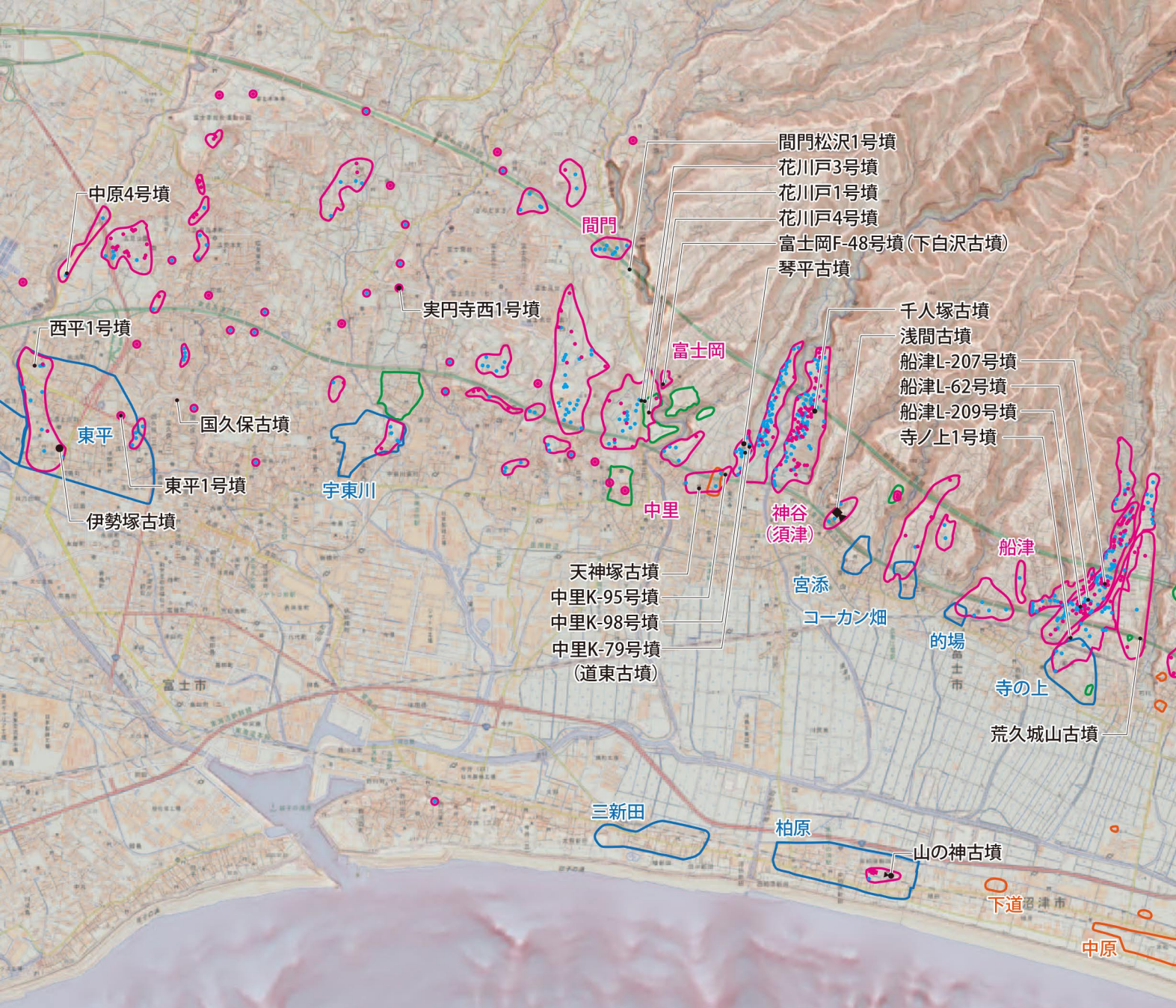


図6 東海地方における後期古墳の埋葬施設からみた地域差



船津古墳群／富士市

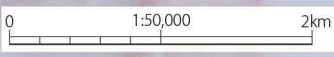


石川古墳群／沼津市



芝原2・3号墳／沼津市

	古墳群	● 主要な古墳
		● 存在する古墳
		● 消滅した古墳
	前期～後期の集落	
	前・中期の集落	
	後期の集落	



赤色立体地図：国土交通省富士砂防事務所が取得した航空レーザ測量データ（平成 31 年度以前）から作成した 1mDEM および日本水路協会「海底地形デジタルデータ M7000 シリーズ（M7001Ver.2.3 関東東南部）」を使用。赤色立体地図は、この DEM をもとにアジア航測株式会社の赤色立体地図作成手法（特許 3670274、特許 4272146）を使用して、アジア航測株式会社・千葉達郎氏が作成した。以上のデータを、静岡県富士山世界遺産センター（小林 淳 教授）より本図作成のために提供頂いた。  
 地形図：国土地理院発行 電子地形図 25000



令和3年度 沼津市・富士市連携 埋蔵文化財活用 特別展示・講演会

# 愛鷹山に眠る**開拓者**たち

東海最大級の古墳群と地域の再生

講演会資料集

発行年月日 令和4年3月10日

発行 沼津市教育委員会・富士市

